大江町道の駅再整備基本構想

令和２年４月

大　　江　　町

≪　目　次　≫

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
１　経緯等
２　基本構想の位置づけ
３　検討委員会の設置と検討経過
第１章　「道の駅おおえ」再整備の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
１　道の駅の概要
（１）道の駅とは
（２）道の駅の目的・機能・コンセプト
（３）道の駅の施設構成（イメージ）
（４）道の駅の整備手法
（５）道の駅の設置者、登録等
２　道の駅を巡る情勢（機能の多様化等）
（１）国の動き
（２）県の動き
３　「道の駅おおえ」の現状と課題
（１）「道の駅おおえ」の概要
（２）「道の駅おおえ」の現状
（３）「道の駅おおえ」の課題
４　地方創生の拠点としての道の駅
（１）大江町の課題
（２）上位計画との整理
第２章　「道の駅おおえ」再整備基本構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
１　再整備目的
（１）大江町総合計画における位置づけ
（２）再整備目的
２　基本コンセプト
（１）基本コンセプト
（２）想定するターゲット等
３　再整備方針
（１）再整備方針
（２）道の駅の整備位置
（３）道の駅の想定規模等
（４）テルメ柏陵エリアの一体整備
４　導入機能と施設の概要
（１）導入機能の考え方
（２）導入機能の検討
５　整備・管理・運営手法の検討
（１）整備主体
（２）整備・管理・運営手法
（３）農業者や町民の運営への参画

はじめに

１　経緯等

・　平成 10 年に開設した「道の駅おおえ」は老朽化や物販施設・駐車場が狭いことなどから民間の経済効果が限られ、また、連携不足により隣接する温泉施設に観光客を誘導できていないなど課題があります。そのような中、平成 28 年３月、県において観光振興、産業振興を図る道の駅の増設を目指す「やまがた道の駅ビジョン 2020」が策定されたことを受け、観光客の取込みと農業をはじめとする産業振興のため、道の駅の再整備を図ることとしました。

・　観光振興に関しては、平成 31 年 4 月の東北中央自動車道の開通（南陽高畠ＩＣ～山形上山ＩＣ）に伴い、首都圏・福島方面からのアクセスが改善されたことや、平成 30 年から山形空港に台湾からの本県初となる国際定期チャーター便が就航したことにより、本県への国内外からの交流人口が拡大していますが、本町や国道 287 号沿線に波及していないことから、広域観光拠点を形成し、観光客の来訪機会創出と町内等への滞在・周遊観光を促す役割が期待されます。

・　産業振興に関しては、基幹産業である農業は農業従事者の高齢化や担い手不足に加え、農産物のブランド化や販売力強化が課題となっており、町内農業者からは地域の販売拠点として道の駅の早期整備が求められています。あわせて農商工業の地域ブランドである“おおえブランド”の PR や販路拡大を図っていく必要があります。

・　また激甚化する災害への対応や、本町の人口減少に進む中で、町の魅力発信を図ることにより関係人口の創出や若者の地元定着を促していくことが期待されます。

・　このように、本町が抱える課題を解決し、地域経済の活性化を図るとともに、地方創生につなげるべく、今般「大江町道の駅再整備基本構想」を策定し、本構想のもと今後道の駅の再整備に向けた詳細な計画づくりを進めてまいります。

２　基本構想の位置づけ

・　基本構想は、道の駅再整備に向けた方向性を示すものであり、今後基本計画策定等を行うううえでの基本的な考え方をまとめたものとします。

３　検討委員会の設置と検討経過

・　基本構想を策定するにあたって、町民や有識者を含めた多様な意見反映させるため、観光、商業、農業、交通等の関係者に国、県、町を加えた 15 名の委員で組織する「大江町道の駅再整備検討委員会」を設置しました。検討委員会の役割としては、基本構想を策定するにあたり必要となる基本コンセプトや機能等についての意見をいただくものです。検討委員会は令和元年 11 月と令和２年１月の２回開催したほか、令和２年３月に書面により各委員に対し意見照会を行いました。

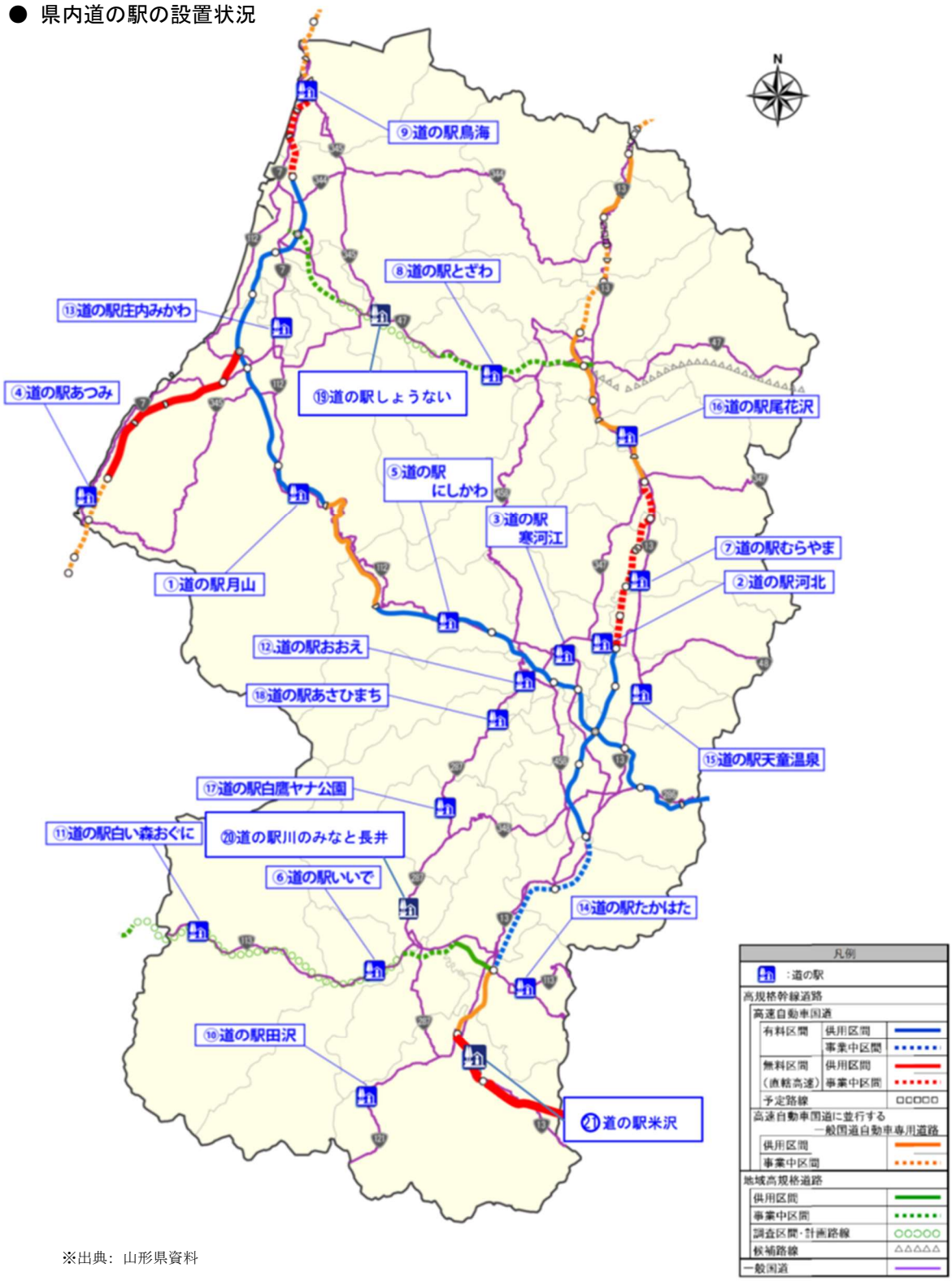
第１章　「道の駅おおえ」再整備の背景

１　道の駅の概要

（１）道の駅とは

- 道の駅は主に市町村が設置し、国土交通省が登録する道路休憩施設です、
- 平成５年の制度創設以来、全国で 1,160 駅（R1.6 月現在）に拡大しています。
- 県内においては 21 駅あり、４地域別で見ると、村山地域が８駅、置賜地域が７駅、庄内地域が５駅、最上地域は１駅となっており、地域差があります。なお、西村山地域は１市４町全てに道の駅が立地しており比較的密度が高く、また道の駅おおえが立地する国道 287 号沿いは村山地域から置賜地域にかけて道の駅が連なるといった特徴があります。

● 県内道の駅の設置状況



※出典：山形県資料

（２）道の駅の目的・機能・コンセプト

① 目的

・ 道路利用者への安全で快適な道路交通環境の提供

・ 地域の振興に寄与

② 機能

・ 休憩機能：24 時間、無料で利用できる駐車場・トイレ

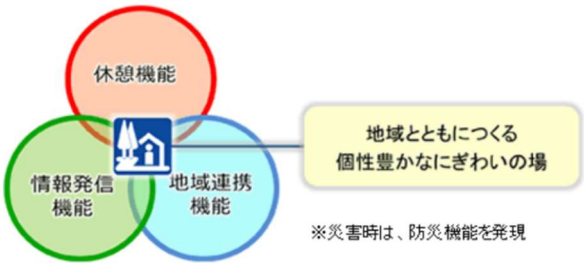
・ 情報発信機能：道路情報、地域の観光情報、緊急医療情報など提供

・ 地域連携機能：文化教養施設、観光レクリエーション施設などの地域振興施設

③ コンセプト

・ 「地域とともにつくる個性豊かなにぎわいの場」

・ 「災害時は、防災機能を発現」



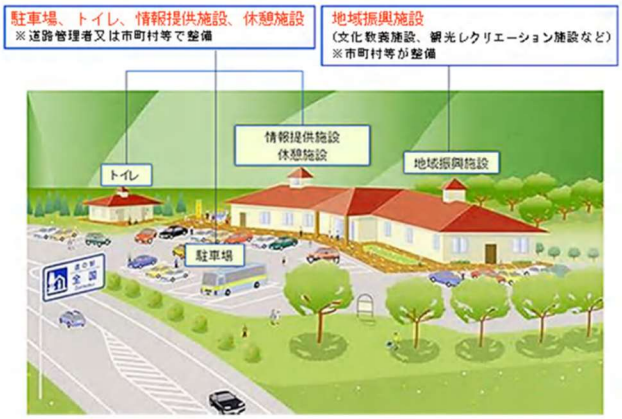
※国土交通省ＨＰより

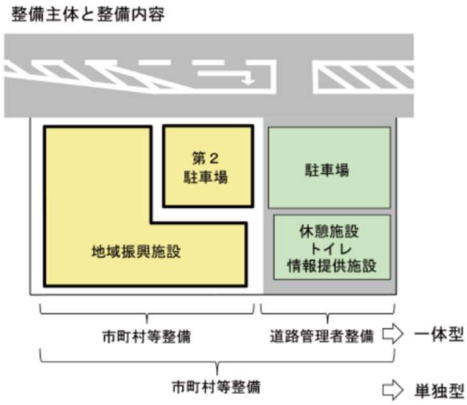
（３）道の駅の施設構成（イメージ）

・ 道の駅は前述の基本３機能を備えた「情報発信・休憩施設」と「地域振興施設」が一体となった道路施設

（４）道の駅の整備手法

・ 整備の方法は、道路管理者と市町村長等で整備する「一体型」と市町村で全て整備を行う「単独型」の２種類あり、道の駅おおえは道路管理者（山形県）と大江町の「一体型」で整備されています。





※国土交通省ＨＰより

（５）道の駅の設置者、登録等

・ 道の駅は市町村又はそれに代わりえる公的な団体が設置

・ 登録は、市町村長からの登録申請により国土交通省で登録

２　道の駅を巡る情勢（機能の多様化等）

（１）国の動き

①　子育て応援施設への位置づけが追加

・　平成 30 年 11 月、「道の駅」登録・案内要綱が一部変更され、ベビーコーナーが備わっていること、妊婦や乳幼児連れへの配慮など、道の駅に子育て応援施設としての位置づけがされています。

②　重点「道の駅」制度

・　国では、道の駅に係る地方創生の核となる特に優れた企画を選定し、重点的に応援する重点「道の駅」の取組みを平成 26 年度から実施。県内では「米沢」(H26) が選定されました。

③　新「道の駅」のあり方検討

・　国では平成 31 年１月から新「道の駅」のあり方検討会が開催されており、11 月に道の駅第３ステージの提言が示されました。前ステージ（第１ステージ（1993 年～）『通過する道路利用者のサービス提供の場』、第２ステージ(2013 年～)『道の駅自体が目的地』) を踏まえ、第３ステージの新たなコンセプトとして『「地方創生・観光を加速する拠点」へ＋ネットワーク化で活力ある地域デザインにも貢献』が設定されました。「2025 年に目指す３つの姿」として、「道の駅を世界ブランドへ」（インバウンド推進)、「新「防災道の駅」が全国の安心拠点に」（広域防災の推進)、「あらゆる世代が活躍する舞台となる地域センターに」（子育て推進、大学等との連携）が掲げられています。

（２）県の動き

・　県では、2020 年代初頭までに、県内の道の駅を計画的かつ積極的に整備し、既存「道の駅」も含めた機能強化を図る方針や、その実現の考え方を示すものとして、平成 28 年３月に「やまがた道の駅ビジョン 2020」が策定されました。同ビジョンでは、道の駅の「山形らしい」基本機能として、基本３機能に加え、「プラス α 機能」として、「防災機能」と「機能の多様化（『やまがた創生』に資する独自の取組みの展開)」が位置付けられており、地域の実情に応じた機能の多様化が求められています。人口減少対策としての『やまがた創生』に資する施策としては、役場や診療所等が集積した“小さな拠点”の形成、移住者対策、高齢者対策等の地域福祉向上を目指すものも含まれます。しかしながら、県内道の駅の８割は地元客より観光客をターゲットとしているため、同ビジョンでは観光振興、地域の産業振興により、食産業王国であり観光資源に富む本県の長所を最大限伸ばしていくことを基本戦略としています。

○『やまがた創生』に資する具体的な取組みの例

小さな拠点機能		地域に根付いた「道の駅」の整備
	役場機能	移転相談・ふるさと納税窓口等の設置
	コミュニティ機能	公民館、集会所等の活動拠点整備
	医療・福祉機能	診療所、介護施設・保養所等高齢者憩いの場、保育園等の整備
	生活改善機能	コンビニ機能、郵便・銀行機能（ＡＴＭ等）の充実
教育・学習機能		地元の大学や高校等の教育機関との連携企画・就労体験の実施
文化振興機能		特産品（伝統工芸）の制作・実演体験の実施
ゲートウェイ機能		高速バス乗り場・パーク＆バスライド等の整備、レンタカーサービスの実施

※「やまがた道の駅ビジョン 2020」より

3　「道の駅おおえ」の現状と課題

（1）「道の駅おおえ」の概要

① **開設年月日**　平成 10 年 10 月 24 日（22 年目）

② **所在地**　山形県西村山郡大江町大字藤田 218-1

③ **施設概要**

- 全体面積　A=8,186.01 ㎡　　総事業費 551,500 千円
- 駐車場 40 台(内障害者用 2 台)、大型車 7 台　**⇒県管理**
- 駅舎(案内センター)　面積=136.56 ㎡　**⇒町管理**
- トイレ　男：小 4 基・大 2 基　女：大 4 基　障害者用：1 基　**⇒県管理**
- 休憩施設(ﾊﾟｰｺﾞﾗ、緑地広場)、道路情報案内板　**⇒県管理**

【航空写真・現況写真】

①駅舎（案内センター）

②トイレ・道路情報案内板

③急速充電器

④緑地広場、おしん筏

駅舎内観（物販）

駅舎内観（軽食）

④ **周辺施設**

- 道の駅おおえは国道 287 号と町道藤田大明神線の交差点に立地し、テルメ柏陵エリアの案内センターとして位置づけられています。テルメ柏陵エリアは町道沿いに、舟唄温泉柏陵荘、観光やな、健康温泉館が立地しています。
- また、国道 287 号沿いでは、道の駅の向かいにコンビニエンスストア、南下すると県立左沢高校が立地しています。なお、町地域防災計画において同校が道の駅周辺エリアの避難所に指定されています。

【周辺施設の航空写真】

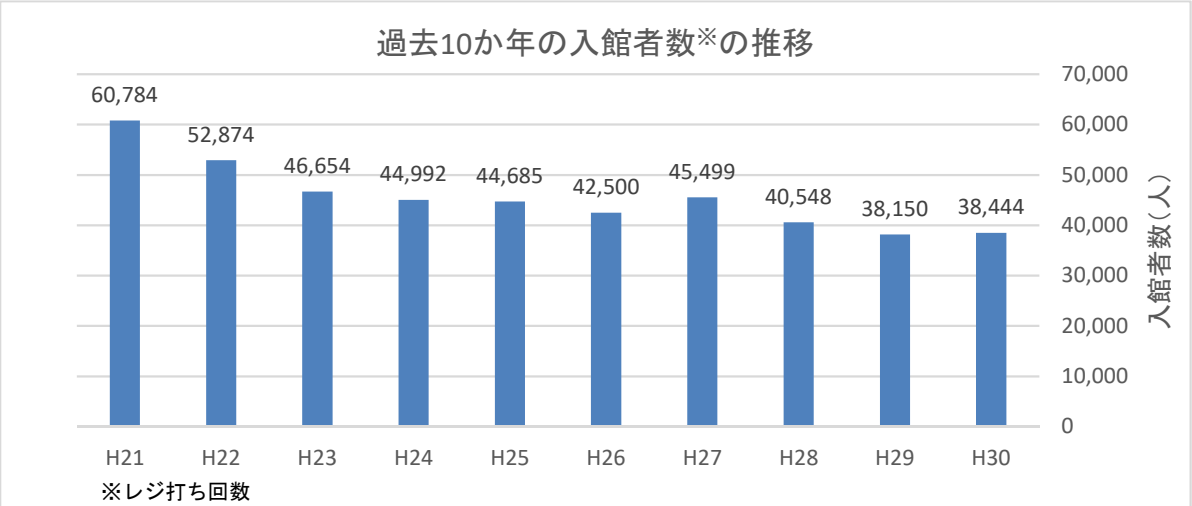
（２）「道の駅おおえ」の現状

① 管理運営

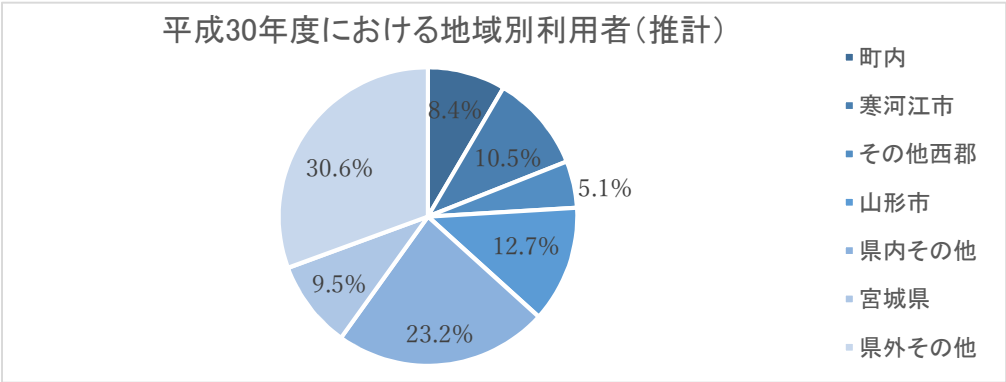
・ 現在、(有)フルーツ館おおえに指定管理により管理運営を委託

② 利用状況

・ 過去 10 年間の入館者数は平成 21 年度をピークに減少傾向にあり、平成 30 年度は 38,444 人（レジ打ち回数ベース）となっている。



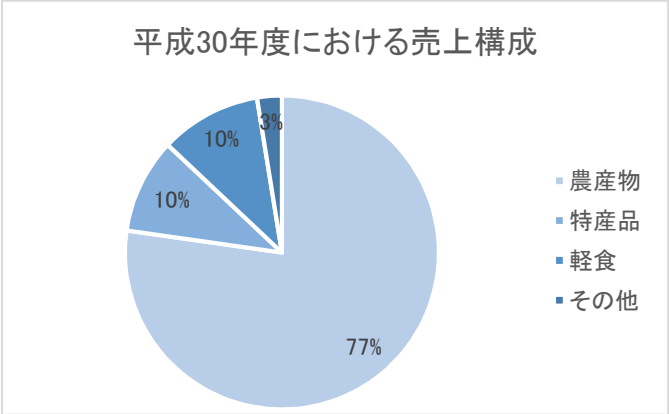
・ 地域別の利用者について、DM 送付先（道の駅おおえがこれまで商品発送を行った利用者）から推計すると、県内客が６割、県外客が４割となっています。また「西村山以外」と「県外」を合算した利用者は 76%を占め、観光客がメインターゲットになっているといえます。



・ 指定管理者からの聞き取りによると、主な利用者は 50 代以上であり、売上においても年配の方のほうが購買意欲は高く、売上の貢献度が高いとのことです。一方で若い客層では箱で果物を購入することは少ないそうです。また平日、休日とも年齢層はあまり変わらず、個人客の利用が多い一方、観光バスなどの団体客は少ないとのことです。
・ また大型トラック運転手の利用が多く、国道 287 号を南下し北陸自動車道を通って関西方面に向かう方が、温泉と果物目当てに利用しているとのことです。
・ 近年、車中泊利用者が増加しています。主に温泉とトイレを利用する目的で、早朝出発するため、道の駅の売上にはつながっていない状況です。

③ 売上の状況

・ 平成 30 年度の売上げ構成としては、農産物直売が 77%を占め、お土産品などの物販と軽食がそれぞれ 10%となっています。



④ 来訪の目的

・ 道の駅からの聞き取りによると、来訪の目的はどの地域の利用者においても、果物と山菜であり、特に果物は安さ（キズものも含めて販売している）とおいしさが評価されているとのことです。山菜は時期が４月下旬から６月下旬と限られますが、西村山郡の道の駅では「にしかわ」に次いで品揃えがあるとのことです。
・ 軽食については、ソフトクリームやそば・うどんのほか、特に餅がシニア層に人気であり、餅目当ての利用者も多いとのことです。
・ 長距離トラックや車中泊を除き、一般の道の駅利用者は健康温泉館（テルメ）を知らない方が多いとのことです。温泉利用者は主に地元客であり、観光客が主の道の駅と客層が異なります。道の駅は「テルメ柏陵」の案内センターとして設置された経緯がありますが、当初の目的を達成できていない状況にあるといえます。

（３）「道の駅おおえ」の課題

① 施設関係（ハード面）

・ 駅舎の物販及び飲食場所が狭隘、産直施設が仮設テント（冬場はプレハブ）
・ 駐車場が狭隘 （無駄なスペースが多く普通車の駐車マスが少ない、横断歩道が危険、一方で大型車は駐車しやすいとの声も）
・ トイレや飲食スペースが狭いため観光バスの立寄り場所から外れている
・ 施設全体の老朽化
・ 国道 287 号からの進入通路が分かりづらい

② 運営面（ソフト面）

・ **利用者数の減少傾向**

「道の駅あさひまち」の新設や「道の駅にしかわ」のリニューアルなど、近隣に競合する道の駅が多いことや、近年、JA さがえ西村山の「アグリランド産直センター」（寒河江市）

や JA さくらんぼひがしねの「よってけポポラ」（東根市）など近隣の産直施設が充実していることが影響していると思われます。現在のメインターゲットが産直目的であるため、価格や品質、品揃えなど、産直の更なる充実が求められることに加え、産直だけではなく、食や物販など施設の総合的な魅力、温泉などエリアとしての魅力を高め、来訪機会を創出していく必要があります。

- **健康温泉館（テルメ）との連携不足**

  健康温泉館（テルメ）は町内観光施設としては最も利用者が多いですが、客層の違いや立地条件、運営者同士の連携不足により、道の駅との相互利用が図られていない状況にあります。観光客の温泉に対する認知度が低いことから、温泉の PR を強化し、温泉の観光客を増やすことで、道の駅の集客を強化していく必要があります。またエリアの回遊性を高めることや、道の駅の「食」の魅力を強化して温泉利用の地元客を取り込むこと、相互集客イベントの実施など対策が求められます。

- **産直組織の会員数減少**

  産直組織「耕せ、おおえ」の正会員（町内）は現在 39 人と、60 人以上いたピーク時から減少しています。一方で会員外（町外）は 30 人から 40 人とピンポイントで出荷する人も多いものの、正会員数と同程度います。町内への経済効果を高めるためには、今後町内の出品者を増やしていく必要があります。

- **子育て世代の取込み**

  現在、年配の方がターゲットとなっており、若い客層が少ない状況にあります。本町は若者の地元定着が課題となっており、再整備に当たっては若い世代が利用したいと思えるような魅力創出を図っていく必要があります。

③　国の動きや県ビジョンに掲げる基本機能等への対応

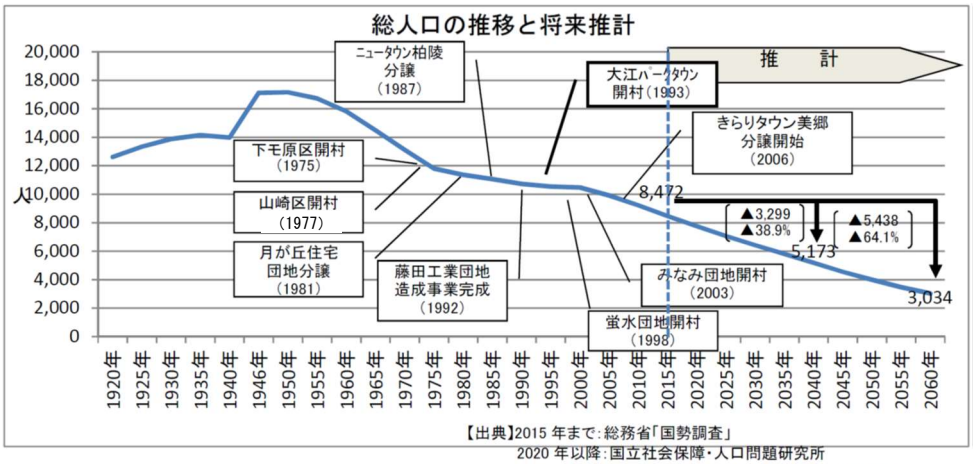
④　地方創生拠点として道の駅に期待される役割への対応

4　地方創生の拠点としての道の駅

（１）大江町の課題

①　大江町人口推移と将来推計

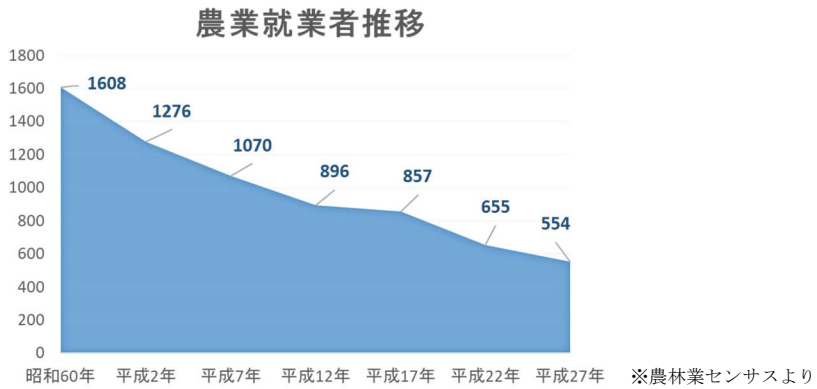
- 総人口：7,991 人（Ｒ２年２月１日住基台帳）
- 1950 年の 17,159 人をピークに、減少が続き、2020 年２月現在では 7,991 人とピーク時の人口の 46.5%の水準となっています。ピーク時から 1975 年頃までは、年間約 200 人の減少が続き、1980 年頃から 2000 年頃までは年間約 50 人減少となり。2000 年頃から現在に至るまでは年間約 150 人の減少で推移しています。社人研による推計では 2060 年の総人口は約 3,000 人まで減少するとされています。



【出典】2015 年まで：総務省「国勢調査」
2020 年以降：国立社会保障・人口問題研究所
「日本の地域別将来推計人口（H30 推計）」

② 大江町の農業

- 人口減少とともに農業就業者も減少しています。農業就業者の確保に向けては、主に首都圏から移住し新規就農する方を支援する「ＯＳＩＮの会」の活躍が目立っています。
- 総農家戸数（H27 農林業センサス）：578 戸（H22：641 戸）
- 農業就業者（同）：554 人（H22：655 人）

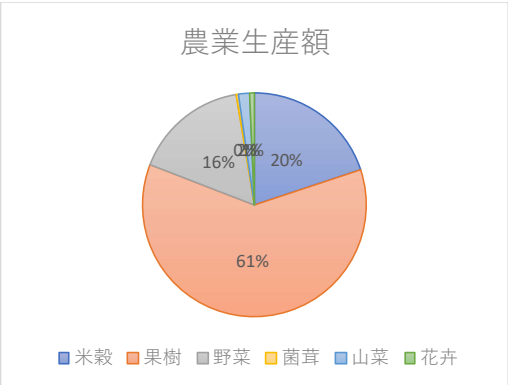


- H29 の農業生産額は、997,179 千円となっており、うち 61%以上を果樹が占めています。果樹の強みがある一方、地元の一般消費者が求める野菜類の生産が少ないという弱みがあります。

〇H29農業生産額

品目	作付面積（ha）	生産数量(t)	生産額（千円）
米穀	290.42	932.61	198,882
果樹	112.45	2,050.20	607,298
野菜	23.3	639.1	164,771
菌茸		2.6	3,295
山菜	4.6	8.3	16,053
花卉	3.7	63.1（千本）	6,889
合計	434.47		997,179

平成29年度　大江営農生活センターしらべ

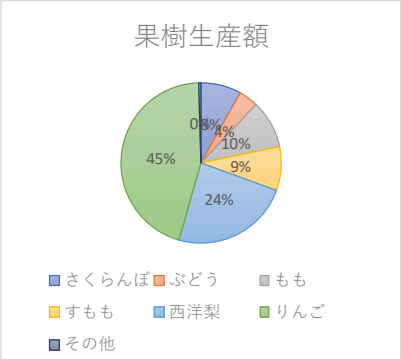


- 果樹生産額のうちりんごが 45%を占め最も大きく、次いで洋梨(24%)、もも(10%)、すもも(9%)、さくらんぼ(8%)、ぶどう(4%)の順となっています。

〇H29果樹生産額

品目	生産者数(人)	作付面積(ha)	生産数量(t)	生産額(千円)
さくらんぼ	51	8.89	22.5	49,288
ぶどう	25	3.9	36.5	23,668
もも	26	8.04	144.3	59,190
すもも	42	20.76	99	53,443
西洋梨	81	21.46	471.6	145,137
りんご	94	49.4	1,268.60	273,580
その他			7.7	2,983
合計		112.45	2,050.20	607,289

平成29年度　大江営農生活センターしらべ

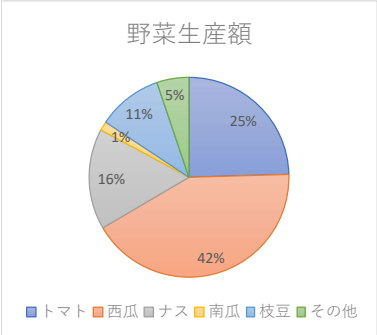


- 野菜生産額のうち西瓜が 42%を占め最も大きく、次いでトマト(25%)、ナス(16%)、枝豆(11%)、南瓜(1%)の順となっています。

〇H29野菜生産額

品目	生産者数(人)	作付面積(ha)	生産数量(t)	生産額(千円)
トマト	11	1.2	124.4	40,476
西瓜	13	9	373.6	69,225
ナス	32	3.2	89.9	26,838
南瓜	14	1.9	11.9	2,368
枝豆	10	8	25.3	17,306
その他			14	8,558
合計		23.3	639.1	164,771

平成29年度　大江営農生活センターしらべ



③　大江町の観光

・　主要観光地観光客数（H30 県観光者数調査）：654.2 千人（H29：669.8 千人）

・　主要な観光施設：楯山公園（日本一公園）、神通峡、大山自然公園、テルメ柏陵健康温泉館、柏陵荘、古寺鉱泉、奥おおえ柳川温泉（宿泊可）、やまさぁーべ（宿泊可）、道の駅おおえ、交流ステーション、小倉交流館、重要文化的景観に指定された古い街並み　等

・　観光イベント：大山自然公園ユリまつり（5 月末～6 月初め）、正調最上川舟唄全国大会（6 月下旬）、水郷大江夏まつり大会灯ろう流し花火大会（8 月中旬）、伝統おおえの秋祭り（9 月）

・　町内に有名な観光地は少なく、季節の祭りなどのイベントや、神通峡・朝日連峰など自然観光を通して誘客を図っている状況にあります。また近隣市町で見られる観光果樹園など、大江の魅力である農業との連携がないことも課題となっています。一方で、街なか観光を推進している「大江町観光ボランティアガイドの会」の活動が好評を博しています。

・　現在の山形観光に係る旅行業者・バス会社の企画については、東北中央道の開通に伴い、日帰りツアーが多くなっており、既に東北中央道～国道 287 号利用のツアーが福島・北関東地区で催行されていますが、「道の駅おおえ」はトイレが狭いことなどから立ち寄り場所から外れている状況です。

・　一方で、近年の観光の傾向として、団体旅行から、個人旅行による日帰りでの広域観光にシフトしていることから、道の駅を起点とし、町内の観光施設や近隣市町と連携した観光ルートづくりを図っていく必要があります。

・　また、平成 30 年から山形空港に台湾からの本県初となる国際定期チャーター便が就航したことにより、本県へのインバウンドが拡大しています。現状、本町への来訪は少ない状況にありますが、今後さらにインバウンドが拡大することを想定していく必要があります。

※楯山（日本一）公園からの眺め

④　地域拠点

・　**教育機関**

道の駅近隣の教育機関として県立左沢高校があります。同校はＪＲ左沢線や路線バスの主な利用者であり地域公共交通を支える存在であるほか、将来を担う地域人材の育成拠点として、本町にとって重要ですが、近年の少子化の傾向により入学者数が減少している状況にあります。町の将来的な活力創造に向け、同校を盛り上げ、地元定着のきっかけとしていくため、食や農などをテーマとした連携企画や就労体験など、互恵関係となるような施策を検討していきます。

・　**防災拠点**

道の駅を含むエリアは近隣の県立左沢高校が地域防災計画に位置づけられています。しかしながら、近年の地震などの災害時、道路利用者や近隣住民が道の駅に避難する事例が見

受けられることから、身近な公共施設である道の駅を一次避難所としていくことが求められます。地域防災計画への位置づけと防災機能を確保していく必要があります。

（２）上位計画との整理

①　国土形成計画法に基づく広域地方計画等

・　東北圏広域地方計画（策定主体：国土交通省、策定年月：平成 28 年３月）
第 4 章第 5 節（４）外国人を含む来訪者の受入環境整備・充実（来訪者の満足度向上のための観光基盤等の整備）
来訪者の満足度向上を図るため、スマートフォンアプリ等を活用した観光情報の提供、地元ボランティア等による観光案内の推進、観光案内看板、観光案内所、観光地内のトイレの整備を推進する。

②　地域住民等の意見を反映のための手続きを経て策定された広域的地域活性化に関する戦略

・　第３次大江都市計画マスタープラン（策定主体：大江町、策定年月：平成 27 年 12 月）

③　関連する国の基本方針等

・　国の基本方針等：観光ビジョン実現プログラム 2019（策定主体：観光立国推進閣僚会議、策定年月：令和元年６月、該当施策：「道の駅」を核とした地域振興）

④　関連する県の基本方針等

・　やまがた道の駅ビジョン 2020　平成 28 年３月

⑤　関連する町の基本計画等

・　大江町総合計画（第９次）　平成 22 年６月策定
（大江町総合計画（第 10 次）　令和２年９月策定予定）
・　第２期大江町まち・ひと・しごと創生総合戦略　令和２年３月策定

第２章　「道の駅おおえ」再整備基本構想

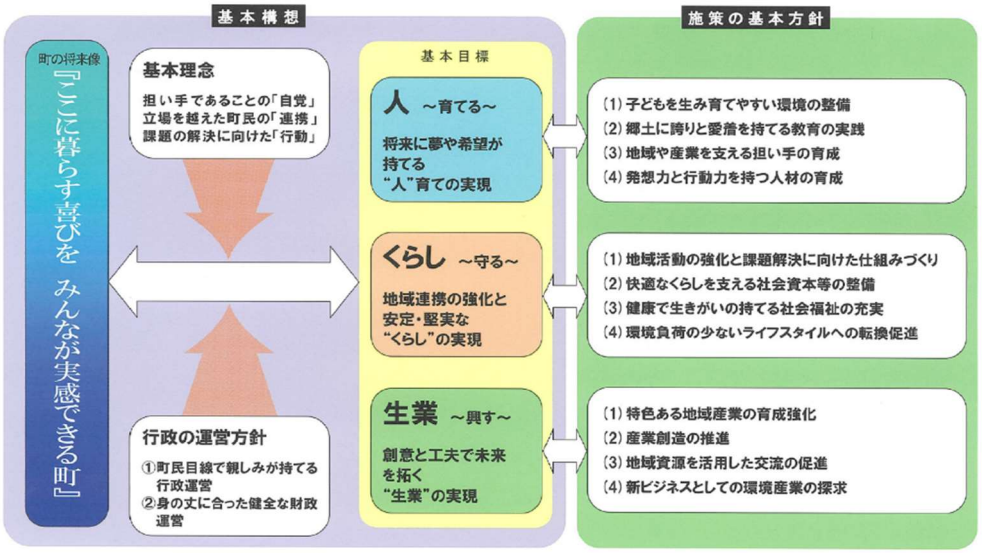
１　再整備目的

（１）大江町総合計画における位置づけ

・　大江町総合計画（第９次）は平成 22 年度を初年度とし平成 31 年度を目標年次とする町の最上位計画です。「ここに暮らす喜びを　みんなが実感できる町」を町の将来像とし、「基本目標」として「将来に夢や希望が持てる“人”育ての実現」、「地域連携の強化と安定・堅実な“くらし”の実現」、「創意と工夫で未来を拓く“生業”の実現」が掲げられてします。

・　再整備する道の駅に期待される役割としては、特に「創意と工夫で未来を拓く“生業”の実現」に掲げる産業振興や交流推進が挙げられるほか、「将来に夢や希望が持てる“人”育ての実現」に掲げる地域や産業の担い手確保、郷土愛の醸成、「地域連携の強化と安定・堅実な“くらし”の実現」に掲げる防災等の体制整備が挙げられます。

○大江町総合計画体系図



（２）再整備目的

・　本町の基幹産業である農業は、果樹・水稲を基幹作物としながら、野菜、畑作物、花き、畜産を取り入れた複合経営が主体となり、りんご、ラ・フランス等を中心とした“くだものの里”としての産地を形成してきました。しかし、農業従事者の高齢化や後継者不足といった課題があるほか、農産物のブランド化や農業経営の安定化に向け、町内農業者からは地域農産物の販売拠点として、道の駅の早期整備が求められています。それと同時に農商工業の地域ブランドである「おおえブランド」の推進に当たっても、そのＰＲ・販売拠点が求められています。

・　また、東北中央自動車道の開通により首都圏・福島方面からのアクセスが改善されたことや、山形空港に台湾からの本県初となる国際定期チャーター便が就航したことにより、本県への国内外からの交流人口は拡大しています。しかし、現状、本町に効果が波及していないことから、施設の老朽化に加え、狭隘な物販施設や駐車場等が課題である道の駅の再整備により、増加する交流人口や観光需要を取り込み、地域産業への経済効果拡大を図っていく必要があります。また道の駅を起点として町内への滞在・周遊観光を促す広域観光ルート開発や情報発信が求められるほか、人口減少対策として、交流人口から発展させた移住・関係人口の創出に向け、町の魅力の発信拠点としての機能も必要となります。

・　このほか、近年、激甚化する自然災害への対応した防災機能の整備に加え、未来の地域活力の創出に向けた教育機関との連携など地域拠点としての役割が期待されます。

・　これらの状況を踏まえて、次のことを目的として道の駅を再整備します。

【再整備目的】
①　基幹産業である農業など町内産業の持続的発展
②　交流人口拡大と町の情報発信強化
③　防災機能強化や人材育成などの地域活力の創出

2　基本コンセプト

（1）基本コンセプト

・　基本コンセプトについては、上位計画や再整備目的を踏まえつつ、利用者目線により施設の利用拡大と安定した経営を図っていくという観点が必要となります。また利用拡大に向けては、ターゲットの来訪の目的が明確であることが求められます。
・　現在、道の駅の利用者は、旬の果物などに関心のあるシニア層の個人観光客が中心であり、産直整備（屋内化）と産品の充実によりこの客層を維持・強化していく必要があります。
・　さらに、誘客強化と地元客の獲得に向けては「食」の魅力を高めていく必要があります。
・　また、隣接する温泉は、現在の主な利用者である観光客にとって認知度が低いですが、全国的に珍しい高濃度な泉質や「舟唄温泉」というキャッチーなネーミングを活かし、ＰＲ強化を図ることで、温泉に関心のある客層を新たに獲得し、道の駅の集客強化を図ります。
・　広域観光の視点からは、道の駅を起点とし、町内の観光コンテンツとの組み合わせにより、大江町らしい着地型観光を推進し町の滞在時間を延ばすともに、広域観光ルート開発や情報発信強化により近隣観光地への周遊促進を図ります。
・　これらのことを踏まえて、基本コンセプトを次のとおり設定します。

【基本コンセプト】
～ 最上川舟運の港町の「温泉」に癒され、「食」を楽しみ、「滞在」を促す道の駅 ～

・　今後、コンセプトを踏まえた道の駅の愛称についても検討を進めます。

（2）想定するターゲット等

①　ターゲットの設定

・　基本コンセプトを踏まえ、メインターゲットとしては、地域の旬の農産物や温泉に関心がある、ミドルからシニア世代の個人の日帰り観光客を想定します。これに加え、施設や食の魅力を高めることにより週末は地元客を含めた子育て世代の取り込みを図ります。
・　ビジネス利用としては、現在の顧客である新潟方面に向かう大型トラックのドライバーの利用を想定します。
・　なお、ターゲットの設定については、今後「道の駅再整備基本計画」の策定を進めるなかで、今後道の駅の利用者アンケート調査などを通じ、更なる明確化を図っていきます。

②　利用者数の想定

・　現在、道の駅のレジ打ち回数は把握しているものの、休憩利用も含めた正確な入込み数がわからない状況となっています。施設規模等を検討するうえで必要となる利用者数については、今後「道の駅再整備基本計画」の策定を進めるなかで、前面交通量や駐車場の利用状況調査を通じ把握します。

３　再整備方針

（１）再整備方針

・　再整備方針は、国の道の駅制度による目的や県ビジョン、前項で整理した再整備目的を踏まえ、以下の３つの再整備方針を設定します。

【再整備方針】

①　地元農産物・加工品やお土産品の販売拠点として整備

②　交流人口拡大と情報発信強化に向けた拠点として整備

③　防災機能等を持つ地域拠点として整備

（２）道の駅の再整備位置

・　現施設は「舟唄の町交流プラザ整備プロジェクト」（Ｈ６～）において、温泉を活用した交流センター（健康温泉館）等のインフォメーションや物産の役割を担う施設として現位置で整備されたものです。

・　再整備に当たっては、従来のテルメ柏陵エリアの案内センター機能に加え、町全体や広域観光の案内センターとしての位置づけで現在の位置で再整備を行います。

・　なお、現在の道の駅敷地において、駐車場レイアウトの見直しによる敷地の有効活用だけでは後述する施設すべてを導入することが難しい場合、周辺施設との連携や役割分担を図るとともに、需要予測等を行い、施設の絞り込み又は敷地拡張の検討を行います。

（３）道の駅の想定規模等

・　再整備する道の駅の施設規模は、今後「道の駅再整備基本計画」の策定を進めるなかで、交通量調査、ネクスコ設計要領、事例調査、整備事業費、採算性を踏まえ、検討していきます。

（４）テルメ柏陵エリアの一体整備

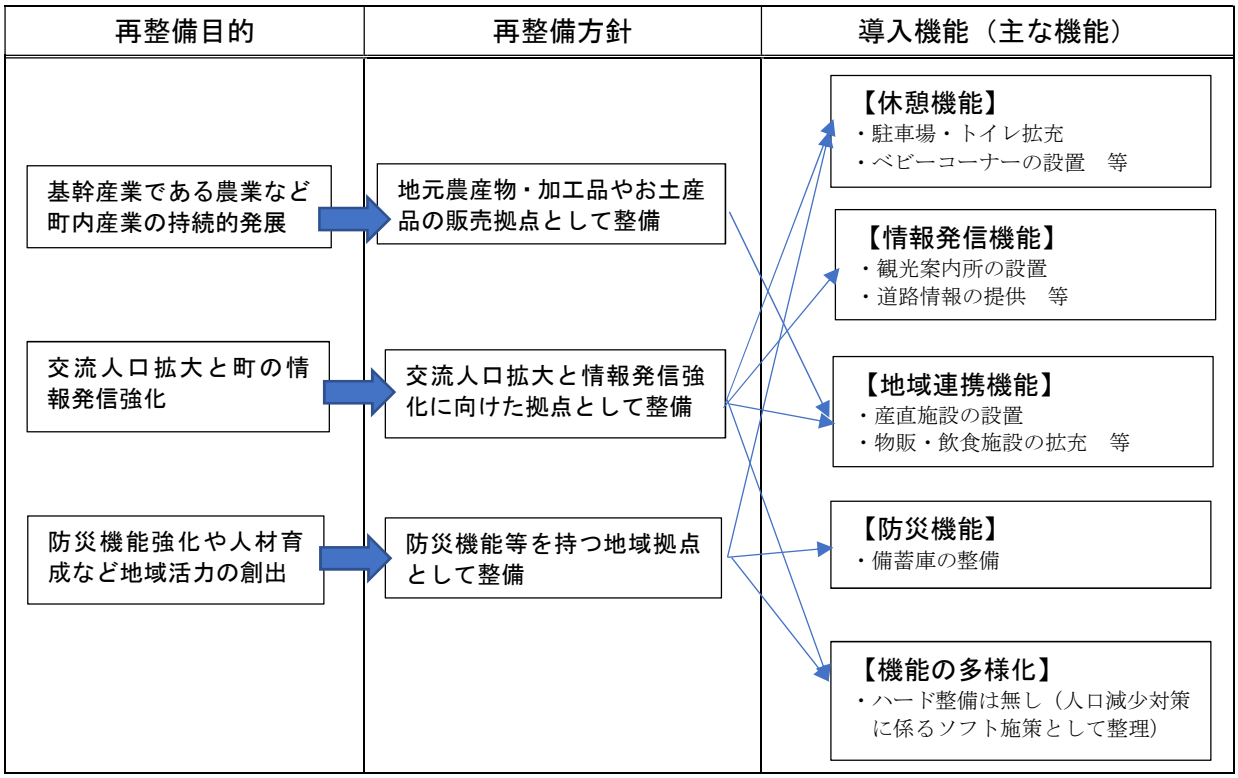
・　道の駅の集客力を強化し、温泉との相互利用を促進し、観光拠点を形成していくに当たって、エリアとして回遊できるように導線を検討していく必要があります。今後、「道の駅再整備基本計画」の中で、利用者アンケート調査などを通じ、温泉との連携をはじめとしたエリア内の連携をハード・ソフト両面から検討していきます。

4　導入機能と施設の概要

（１）導入機能の考え方

・　県ビジョンでは、道の駅の「山形らしい」基本機能として、国が掲げる「休憩機能」、「情報発信機能」、「地域連携機能」の基本３機能に加え、「プラスα機能」として、「防災機能」と「機能の多様化（『やまがた創生』に資する独自の取組みの展開）」が位置付けられています。県ビジョンや国の動向、前項の再整備目的や再整備方針を踏まえ、導入機能を次のとおり整理します。

【再整備目的・再整備方針・導入機能のイメージ図】



（２）導入機能の検討

※　現在の道の駅敷地において、駐車場レイアウトの見直しによる敷地の有効活用だけでは後述する施設すべてを導入することが難しい場合、周辺施設との連携や役割分担を図るとともに、需要予測等を行い、施設の絞り込み又は敷地拡張の検討を行います。

①　休憩機能

・　駐車場とトイレの拡充、妊婦や子連れに配慮した安心安全な駐車場レイアウトに再整備

・　ベビーコーナーを設置し子育て応援機能強化、ＲＶパーク設置により車中泊ニーズに対応

【具体的な導入施設】

導入機能	現状・課題	機能の整備方針	導入施設
駐車場 （拡充）	【現状】 ・普通 40 台 （うち障がい者用優先駐車場 2 台） ・大型車 7 台 ・ＥＶ用急速充電器 1 基 ※県管理 【課題】 ・駐車場が狭隘 ・配置が不便、国道 287 号からの進入通路が複雑、右折レーンがなく入りにくい ・障がい者用駐車場以外は横断歩道を通らなければならず子連れ客など危険 ・一方で大型車は駐車しやすい評価	・レイアウトを効率化し、可能な限り駐車台数を拡充 ・歩行者と車両との交錯をできるだけ少なくし、子連れ客が安心して利用できるよう整備 ・妊婦向け屋根付き優先駐車場や子連れ優先駐車場を整備	・駐車台数の拡充 （進入通路の効率化、駐車場の安全性向上）（拡充） ・妊婦向け屋根付き優先駐車場と子連れ優先駐車場の整備（新）

トイレ（拡充）	【現状】 （24時間利用可能屋外トイレ：県管理） ・男：小4基・大2基、ベビーチェア ・女：大4基、ベビーチェア、ベビーベッド、オストメイト対応 ・多機能：1基、車いす、オストメイト対応 【課題】 ・トイレ数が少なく団体客に対応できない ・駐車場を拡充する場合、トイレ不足が懸念される	・駅舎内にトイレを新設し、利用者利便性を高め、団体客等に対応する ・エアコンを設置するなど冬でも暖かく	・駅舎内に男女別のトイレ及び多機能トイレ設置（新）
ベビーコーナー（新）	【現状】 ・女子トイレにベビーベッドあり 【課題】 ・女子トイレにしかベビーベッドがなく、男性がおむつ替えできない。屋外トイレのため冬寒い ・授乳室やおむつ替え台などを備えたベビーコーナーがない	・駅舎内にベビーコーナー（授乳室、おむつ替え台、調乳用流し台等）を設置し、子育て応援機能を充実させる ・エアコンを設置するなど冬でも暖かく	・駅舎内にベビーコーナー（授乳室等）設置（新） 【関連施策】 ・物販施設で少量パックのおむつ、おしりふきなど販売 ・子連れで楽しい町内の公園、キャンプ場、施設などを紹介し、町の中心地にも来てもらう
駐輪スペース（新）	【現状】 ・サイクリング人口の増加	・サイクリストを取り込むため、ロードバイク用駐輪スペースを確保する	・ロードバイク用駐輪ラック設置（新） 【関連施策】 ・サイクリングロードマップの作成
ＲＶパーク（新） ※要検討	【現状・課題】 ・車中泊ニーズの高まりに対し、温泉施設・コンビニが隣接する強みを活かしきれていない	・車中泊専用エリア（ＲＶパーク）を整備し、温泉施設等の利用促進を図る ※検討委員会において、RVパークを設置した他道の駅の声として「利用マナーの悪さ」、「長期占用による一般利用スペース減少」等の課題があるため、敷地面積が限られる「道の駅おおえ」において本当に必要なのかとの意見あり。慎重な検討を要する。	・車中泊専用エリア（RVパーク）整備（新）
足湯（新） ※要検討	【現状・課題】 ・温泉との連携が図られておらず、利用者に温泉があることをＰＲする必要がある。	・足湯による休憩機能強化 ※検討委員会において、温泉のＰＲのため足湯を設置してはどうかとの意見が挙がった。しかし、本当に必要かという意見もあることや舟唄温泉の湧出量も豊富ではないことから、慎重な検討を要する。	・足湯（新） ※検討委員会では足湯は最上川の形状や舟型にするなど意見あり

② 情報発信機能

・ 観光案内所による周遊促進・温泉のＰＲ強化、大江でしかできない体験窓口の設置検討

・ インバウンドに対応した情報提供強化、無料公衆無線LANの整備

【具体的な導入施設】

導入機能	現状・課題	機能の整備方針	導入施設
観光案内施設（新）	【現状】 ・パンフレットラック設置のみ 【課題】 ・本町の観光地の知名度不足	・強みである温泉のＰＲを強化し、利用者の温泉等への誘導を図るなど観光案内拠点として整備 ・訪日外国人旅行者など	・観光案内施設（新） ・案内表示など受入態勢の多言語化（新） ・Wi-fi環境の整備（新） 【関連施策】 ・デジタルサイネージ等で観光ＰＲ動画（朝日連峰の絶景や重要文化的景観の町並みな

	・来訪者の町内滞在・周遊促進強化 ・隣接するテルメ柏陵等の連携不足 ・インバウンドに対する情報提供不足 ・近隣道の駅や観光施設との連携 ・国道287号は生活道路であり、観光バスが通ることは少ない	への情報提供を強化 ・大江でしかできない体験の案内窓口（農業体験など）の機能を検討 ・国道 287 号などを活用し、近隣観光施設（道の駅など）と連携した広域観光の推進	ど）の放映 ・「おしん」の動画及び音楽の活用 ・観光ボランティアガイドの窓口設置（休日のみ） ・大江でしかできない体験の開発検討 ※検討委員会で挙がった体験の例 1)重要文化的景観の町歩きツアーや観光果樹園の実施など着地型観光の推進 2)エリア内で温泉とウォーキングを組み合わせ、滞在時間を延ばす 3)「温泉卵作り体験」(時間がかかるため地元客向け)、「やなで鮎つかみ取り」、「あおそコースター作り体験」などの実施 ・誘客に向けて近隣市町と連携し、オープン約２年前からセールス実施（仙台圏・福島県含む北関東圏） ・多言語対応したＨＰ、ＳＮＳによる発信力強化
通行止め・路面凍結等の情報提供（拡充）	**【現状】** ・県管理の道路情報案内板あり **【課題】** ・訪日外国人旅行者などに対する情報提供不足	・訪日外国人旅行者などへの情報提供を強化	・道路情報を提供するモニターの設置（新）

③　地域連携機能

・　「道の駅おおえ」が目的地となるような、産直・物販・食の充実強化（大江でしか買うことのできない農産物・お土産品、大江でしか食べることのできない食事の提供）

【具体的な導入施設】

導入機能	現状・課題	機能の整備方針	導入施設
産地直売施設（新）	**【現状】** ・売上の約８割を占め、強みではあるが、仮設販売（夏はテント、冬はプレハブ） ・年配の利用者が多い **【課題】** ・産直組織の高齢化、会員減による農産物の町内調達率低下 ・仮設販売のためブランド果物等が販売できない ・地元農産物の知名度不足	・本施設の強みである産直施設の整備し、地元農産物のブランド化や地産地消を推進する	・産直施設（新） **【関連施策】** ・産直組織の強化・運営方法の検討 ・大江ならではの農産物・加工品販売（果物を主とし特に町独自の果物の重点ＰＲを行う） ・通年販売が出来る地元農産物等の生産基盤の確保 ・生産者の表示 ・電子決済システム等の導入
物販施設（拡充）	**【現状】** ・売上の約１割。お土産販売 **【課題】** ・物販スペースが狭く、商品が限られる。地場産品が少ない ・地元特産品の知名度不足	・「おおえブランド」等との連携やオリジナル商品開発により地域アンテナショップとして整備	・物販施設（拡充） **【関連施策】** ・「おおえブランド」をはじめとした町内出品希望者との連携、オリジナル商品開発 ・電子決済システム等の導入
飲食施設（拡充）	**【現状】** ・売上の約１割。そば・うどん、餅、焼きおにぎり、ソフトクリーム等の軽食 ・年配の利用者が多い **【課題】** ・厨房が狭いため、定食メニューが出せない ・食事スペースが狭く、団体客に対応できない ・子育て世代の取り込み	・団体客に対応できる施設規模（50～100 席）とし、本町の食と農の魅力を体感できる施設として整備(SA 方式を想定) ・気軽に楽しめる軽食の充実や地域食材を使った健康で安全・安心な食メニューの開発を図る ・テラス席を設置しくつろぎと賑わいを創出 ※検討委員会ではテラス席が	・飲食施設（拡充） **【関連施策】** ・目玉となる食メニューの検討開発（手軽でリーズナブルな名物） ※検討委員会で挙がった食の例 1)産直の強みを活かし、旬の果物のフレッシュジュース（ジュースバーの設置）やその場ですぐ食べられる新鮮カットフルーツの提供（カットするためキズ物でも大丈夫）

		あれば若い世代に軽食が売れるのでは、との意見あり	2)現在シニア層に人気の“餅”を特徴の一つとして検討していく 3)現在のメニューを工夫（そばを舟盛にする（やまがた地鶏のつけ汁）、ソフトクリームに焼き立てワッフルを添える等） ・電子決済システム等の導入

④　防災機能

・　激甚化する災害に対応し、防災拠点として位置づけ。備蓄庫の整備

【具体的な導入施設】

導入機能	現状・課題	機能の整備方針	導入施設
備蓄庫（新）	【現状・課題】 ・災害時、道の駅へ避難する事例が全国的に多い。災害の激甚化への対応が必要 ・現在、地域防災計画への位置づけがない	・近隣住民や道路利用者の防災拠点として整備	・備蓄庫（新） 【関連施策】 ・地域防災計画への位置づけ ・ＢＣＰ（事業継続計画）の策定

⑤　機能の多様化（地方創生に係る関連ソフト施策）

・　新規就農など移住定住の推進、教育機関との連携、関係人口の創出・拡大

【具体的な導入機能】

導入機能	現状・課題	想定される施策
担い手確保・移住定住促進	・新規就農研修生の受入れを推進しているが、自治体間競争が激しく、取組み強化が必要	・若手就農者等の売場（棚）設置や就農相談イベント開催等によるＰＲ強化 ・移住定住関連情報の発信
教育機関との連携	・若者の地元定着が課題	・左沢高校との連携（イベント企画、農産物直売などによる賑わいづくり）
関係人口の創出・拡大	・移住拡大に向け、関係人口の創出・拡大を図る	・ふるさと納税の申込端末の設置 ・子どもの都市農村交流に向けた情報発信
地域間連携の推進	・売り場の品揃え充実	・文化事業で相互協力する亘理町とのコラボ（海の幸など） ・西村山地域の特産品販売（品揃えの充実）
交通結節機能の強化	・交通弱者や JR 利用者（個人旅行）への対応	・既存路線バスの案内強化による利用促進 ※検討委員会にて、バス事業者によると路線バスの経路変更、バス停設置については、現在も朝日町行きは通過しているので可能だが、寒河江行きに関しては一度町道に入るため、道路管理者と左沢高校との調整が必要となるとのこと ・町営バス等による二次交通強化

＜参考＞その他、検討委員会での再整備方針・導入機能に係る意見等

・　トイレは周辺に無いくらい充実したものにしてほしい

・　ベビーコーナーに幼児用パックジュースの自販機があるとうれしい（上の子向け）

・　ロードバイクの盗難防止にカギを貸し出してはどうか

・　温泉については道の駅との連携・ＰＲ方法をどのようにしていくのか

・　温泉が隣接することが強みだが、柏陵荘と健康温泉館の違いが不明確

・　子育て世代の取込みについて、公園や散歩ルート整備など、訪れる目的が無ければ来ないのではないか

・　エリア内にイベント広場を設置し、季節ごと音楽・町民とのふれあい・体験行事を実施してはどうか

・　健康温泉館の東側の最上川川沿いは車で近くまで行けるため、オートキャンプ場としてどうか

・　道の駅周辺の農地を観光果樹園としてはどうか

・　JR 左沢駅～道の駅間のシャトルバス、寒河江～道の駅～朝日町～荒砥駅間の路線バスを整備してはどうか（個人旅行・JR 左沢線との旅行商品開発）

・　他県、特に都会から来店の場合、大江町（田舎）に来たという雰囲気がある駅舎をつくってもらいたい

５　整備・管理・運営手法の検討

（１）整備主体

・　引き続き「一体型」の道の駅として再整備し、道路管理者である県と連携を図りながら整備を進めていきます。整備の進め方は県ビジョンに掲げる整備フローに準じます。

（２）整備・管理・運営手法

①　全体スケジュール（予定）

年度	内容	推進主体
令和元年度	再整備に向けた基本構想の策定	検討委員会
令和２年度	基本計画の策定	連絡協議会
令和３年度	基本設計	連絡協議会
令和４年度	測量設計及び実施設計、指定管理者選定	連絡協議会、指定管理予定者
令和５年度	駅舎建築工事一式、工事監理	連絡協議会、指定管理予定者
令和６年度	リニューアルオープン	指定管理者

②　管理運営手法

・　民間事業者固有のノウハウ等を発揮できる施設であるため、指定管理者制度を想定しています。

③　現駅舎について

・　現在の指定管理期間は令和３年３月末まで。令和３年４月から令和６年３月末までの３年間の管理運営については令和２年度中に指定管理者の公募を行う予定です。

（３）農業者や町民の運営への参画

・　道の駅は農産物や加工品の販売拠点としての役割を担うため、特に産直施設の運営に当たっては、地域の農業者・農業団体をはじめ、周辺市町の農業者も含めた農業者と連携しながら進めていく体制づくりが必要となる。また観光ボランティアガイドなど町民の活動拠点となることを想定し、町民に配慮した体制づくりが必要となります。